



A Series of Cult Classics NO.5

かつて屈折した星屑が地球に舞い降りたという伝説あり...



ZIGGY STARDUST

DAVID BOWIE

デヴィッド・ボウイ

Live Recording Produced & Mixed: David Bowie & Mick Ronson
a film by D.A.Pennabaker



Distributed by CABLE HOGUE co., Ltd.

CH presents

© 1982, 1997 copyright Jones Music / TAMT

photo by MASAYOSHI SUKITA

『ペルベット・ゴールドマイン』のインスピレーションのもと、これぞグラム! ジギー=ボウイの華麗なLIVEドキュメント、ついに解禁。

ボウイが自らグラムを葬った宿命のパフォーマンス

文◎多野雄二 (映画評論家) text by YUJI KONNO

「今夜のステージは特別だ。ツアーの締めくくりであると同時に僕らにとって最後のステージだから——最後のアンコール曲となる「ロックン・ロール・スイサイド」を歌い始める前のボウイの〈引退宣言〉は、会場を埋め尽くしたファンたちを驚かせ、悲嘆にくれさせた。

D.A. ベメハイカー監督の『ジギー・スターダスト』は、ボウイが自ら、当時最高潮といっても良いほどに盛り上っていたグラム・ロックのフームに終止符を打った決定的な瞬間をはからずともとらえたドキュメンタリーである。1973年7月3日、ロンドンのハーマスミス・オデオン劇場がその舞台であった。

一説によれば、グラム・ロックの誕生はアルバム『ジギー・スターダスト』からの第1弾シングル「スターマン」が、1972年6月に発売された時である、という。

この年、筆者はロンドンで取材していて、幸運にもロクシー・ミュージックを前座に促されたボウイの〈ジギー・スターダスト〉のショーを観た。1972年8月19日、ロンドンのレインボウ・シアターがその会場であった。グラム・ロックという言葉は、筆者の記憶ではまだ一般的なものではなかった。けれどもレインボウを埋めた若い観客たちの大半は染めたヘアを逆立て、派手にメイク・アップして、キンキラギンのコスチュームをまとい、10センチ以上もある上げ底靴をはいた男の子や女の子たちだった。ボウイ・キッズやロクシー・ベイビーたちである。ボウイもロクシーも、ロックン・ロールにきらびやかでグラマラスな魅力を取りもどさせたことが、イギリスの若者たちの心をとらえたのである。その頃の若者文化は依然として、うす汚い恰好で自然帰帰をめざし、ラス&ピースを叫ぶウッドストック世代の影響を引きずっていた。ステージに出てくるミュージシャンもTシャツとジーンズという無愛想なもので、観客に背中を向けてアンプをにらみながらギターのアド・リブに没頭するという屈辱さがまかり通っていた。

ボウイやロクシーたちがめざしたのはその対極にあるグラマラスな華やかさ、ショー・アップの魅力であった。しかもボウイの天才的なところは、その上更に彼自身を架空のキャラクターへと変身させたこと——宇宙からこの地球に落ちてきたバイセクシュアルのロックン・ロールの教主。その名もジギー・スターダスト。そして彼のバンドはスパイダース・フロム・マーズと名づけた。ボウイの創造した画期的な新世界となったのである。ボウイはジギーであり、ジギーはボウイである——グラム・ロックのも

っとも核心的ともいえる実容の美学を、ボウイはこうして体現してみせた。

「これはミックに……あるいは「親友のルー・リードが……」と前置きしながらローリング・ストーンズやヴェルヴェット・アンダーグラウンドのヒット曲を歌っているのは、実はジギーでありボウイではない。当時のボウイの妻のアンジーが目撃した夫婦のベッドでミック・ジャガーと抱き合っていたのも、記者会見の席上でルー・リードとキッスしたのも、どちらもボウイではなく、バイセクシュアルのエイリアン、即ちジギーの方であった! (後にボウイがホモセクシュアルを公言した過去をきっぱりと否定しているのも、その為である。)

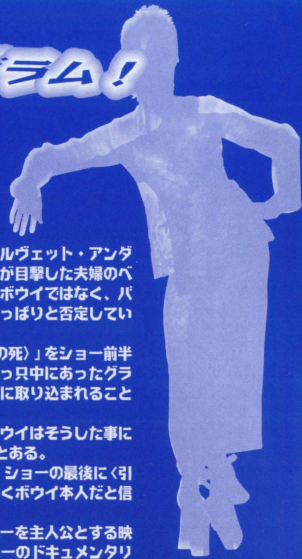
もっとも筆者としてはかねて敬愛するベルギー出身のシャンソン歌手ジャック・フレルの「マイ・テス (私の死)」をショー前半のラストで歌うボウイだけはジギーならぬ彼自身の素顔だと思いたい——この時ボウイは、すでにフームの真っ只中に入ったグラム・ロックに、キャリア・クリッターとかスウィートなどのB級パサルガム・サウンドが自分としゃくたに取り込まれることに屈辱感を抱き始めていたのである。

イギリスのポッス・カルチャー評論家バーニー・ホスキンスの『グラム!』(拙訳/徳間書店)によれば、ボウイはそうした事に腹立たしさを覚え、ジギー・スターダストをこの世から消してしまおうと決意させる理由のひとつになった、とある。

ジギーを演じながらボウイは「私の死」でグラム・ロッカーとしての真情を吐露していたに違いないのだが、ショーの最後に〈引退宣言〉をする時はみごとにジギー—そのものとなっていた。当時、ファンたちは〈引退〉するのジギーではなくボウイ本人だと信じ込み、パニックに陥ったというも争となつては微笑ましいエピソードの如くに思われる。

その〈引退宣言〉を〈狂言自殺〉に置き換え、当時のボウイを彷彿させるバイセクシュアルのグラム・ロッカーを主人公とする映画『ペルベット・ゴールドマイン』を撮ったトッド・ヘインズ監督は、その映画の序盤でこのD.A. ベメハイカーのドキュメンタリー—のオーストリング・シークェンスの楽屋の光景を殆どそっくり再現している。

そういえば、赤ん坊のオスカー・ワイルドと宇宙船を登場させたヘインズ作品のフロログも、ひょっとすると「母が宇宙船を見た」というこの映画の冒頭のボウイのひと言に大いに触発されたものと思えてくるのではない!



IN DAVID BOWIE

ジギー・スターダスト

ORIGINAL SOUND CREDIT OF ZIGGY STARDUST

- HANG ON TO YOURSELF
- ZIGGY STARDUST
- WATCH THAT MAN
- WILD EYED BOY FROM FREECROWD
- ALL THE YOUNG DUDES
- OH! YOU PRETTY THINGS
- MOONAGE DAYDREAM
- CHANGES
- SPACE ODDITY
- MY DEATH
- CRACKED ACTOR
- TIME
- WIDTH OF A CIRCLE
- LET'S SPEND THE NIGHT TOGETHER
- SUFFRAGETTE CITY
- WHITE LIGHT/WHITE HEAT
- ROCK'N ROLL SUICIDE



DIRECTED BY D.A.PENNEBAKER
LIVE RECORDING PRODUCED & MIXED: DAVID BOWIE & MICK RONSON
1973 / U.K. / COLOR / DOLBY STEREO / 90MIN.

DISTRIBUTED BY CABLE HOGUE CO., LTD.
CUP PRESENTS
©1982, 1997 COPYRIGHT JONES MUSIC / TAMI



グラムオブグラム

デヴィッド・ボウイ 今宵、降臨

〈地球に落ちてきた男・完全版〉
5月29日(土)~6月11日(金) 連日PM8:20~

〈ジギー・スターダスト〉
6月12日(土)~25日(金) 連日PM9:05~

共通前売券¥1400発売中
劇場窓口ほか市内プレイガイド
びあ、ローソンでお求め下さい。

心斎橋アメリカ村 BIG STEP4F 06 (6282)
パラダイスシネマ 1460

